

日蓮大聖人御書全集

みようほうあまごぜんごへんじ

妙法尼御前御返事

りんじゅういちだいじ こと

（臨終一大事の事）

新版
2101
〜
2103

妙法尼御前御返事

（臨終一大事の事）

弘安元年（'78）7月14日 57歳 妙法尼

御消息に云わく「みようほうれんげきようを、よるひる

となえまいらせ、すでにちかくなりて、二声こうしように

となえ、乃至いきて候いし時よりも、なおいろもしろく、

かたちもそんぜず」と云々。

法華經に云わく「如是相乃至本末究竟等」云々。大論に云

わく「臨終の時に色黒きは、地獄に墮つ」等云々。守護經

に云わく「地獄に墮つるに十五の相、餓鬼に八種の相、畜生

に五種の相」等云々。天台大師の摩訶止觀に云わく「身の
黒色は地獄の陰を譬う」等云々。

そ おも うちにれんようしよう とき ぶつぽう がく そうら

夫れ以んみれば、日蓮幼少の時より仏法を學し候いし

ねんがん ひと じゆみよう むじよう い いき い

が、念願すらく「人の寿命は無常なり。出ずる氣は入る氣

ま かぜ まえ つゆ たと 賢

を待つことなし。風の前の露、なお譬えにあらず。かしこき

果 無 お わか さだ な なら

も、はかなきも、老いたるも、若きも、定め無き習いなり。

りんじゆう なら のち たじ なら

されば、まず臨終のことを習つて後に他事を習うべし」と

おも いちだいしようぎよう ろんじ にんし しょしやく 粗 々 勘

思つて、一代聖教の論師・人師の書釈あらあらかんがえ

集 みようきよう いっさい しょにん し とき

あつめて、これを明鏡として一切の諸人の死する時とな

りんじゅう

のち

ひむ

見そうら

らびに臨終の後とに引き向かえてみ候えば、すこしも

曇

ひと

じごく

お

ないしにんてん

見

くもりなし。この人は地獄に堕ちぬ、乃至人天とはみえて

そうろう

せけん

ひとびと

ししゅう

ふぼとう

りんじゅう

そう

候を、世間の人々、あるいは師匠・父母等の臨終の相を

隠

さいほうじょうどおうじょう

もう

そうろう

かな

ししゅう

かくして、西方浄土往生とのみ申し候。悲しいかな、師匠

あくどう

お

おお

く

忍

でし

留

は悪道に堕ちて多くの苦しのびがたければ、弟子はとどま

居

し

りんじゅう

讃

歎

じごく

く

ぞうちょう

りいて師の臨終をさんだんし、地獄の苦を増長せしむる。

たと

罪

深

もの

くち

塞

糾

問

腫

もの

譬えば、つみふかき者を口をふさいできゅうもんし、はれ物

くち

開

病

の口をあけずしてやまするがごとし。

いま

ごしやうそく

い

生

そうら

とき

しかるに、今の御消息に云わく「いきて候いし時よりも、

色 白

形 損

うんぬん てんたいい

なおいろしろく、かたちもそんぜず」と云々。天台云わく

びやくびやく てん たと だいろん い しやくびやくたんじよう もの

「白々は天を譬う」。大論に云わく「赤白端正なる者は

てんじよう う うんぬん てんたいい しごりんじゆう き い いろしろ

天上を得」云々。天台大師御臨終の記に云わく「色白し」。

げんじようさんぞうごりんじゆう しろ い いろしろ いちたいしろうぎよう さだ

玄奘三蔵御臨終を記して云わく「色白し」。一代聖教の定

みようもく い こくごう ろくごう 留 はくごう ししよう

まれる名目に云わく「黒業は六道にとどまり、白業は四聖

もんしよう げんしよう 勘 そうろう

となる」。これらの文証と現証をもつてかんがえて候に、

ひと てん しよう

この人は天に生ぜるか。

ほけきよう みようごう りんじゆう にへん 唱 うんぬん

はたまた、「法華經の名号を臨終に二反となう」と云々。

ほけきよう だいしち まき い われめつど のち まさ

法華經の第七の卷に云わく「我滅度して後において、応に

きよう じゅじ

ひと ぶつどう

けつじよう

この経を受持すべし。この人は仏道において、決定して

うたが

うんぬん いちだい しょうぎよう

疑いあることなけん」云々。一代の聖教、いずれもいず

疎

そうら

みな

われ

しんぷ

だいしよう

れもおろかなることは候わず。皆、我らが親父・大聖・

きようしゆしやくそん

きんげん

みなしんじつ

みなじつご

なか

教主釈尊の金言なり。皆真実なり、皆実語なり。その中に

しょうじよう

だいじよう

けんきよう

みつきよう

ごんだいじよう

じつだいじよう

おいて、また小乗・大乘、顕教・密教、権大乘・実大乘

相 分

そうろう

ぶつせつ

もう

にてんさんせん

げどう

どうし

あいわかれて候。仏説と申すは、二天三仙の外道、道士の

きようぎよう

対

そうら

もうご

ぶつせつ

じつご

経々にたいし候えば、これらは妄語、仏説は実語にて

そうろう

じつご

なか

もうご

じつご

きご

あつく

候。この実語の中に、妄語あり、実語あり、綺語も悪口も

ほけきよう

じつご

なか

じつご

しんじつ

なか

あり。その中に、法華経は実語の中の実語なり。真実の中の

しんじつ

しんこんしゅう

けこんしゅう

さんろん

ほつそう

くしや

じようじつ

眞実なり。眞言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舎・成実と

りつしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅうとう

じつご

なか

もうご

た い

律宗と念仏宗と禪宗等は、実語の中の妄語より立て出だ

しゅうじゅう

ほつけしゅう

しゅうじゅう

似

せる宗々なり。法華宗は、これらの宗々にはにるべく

じつご

ほけきよう

じつご

いちだいもうご

もなき実語なり。法華經の実語なるのみならず、一代妄語の

きようぎよう

ほけきよう

たいかい

い

ほけきよう

おんちから

經々すら、法華經の大海に入りぬれば、法華經の御力に

責

じつご

そうろう

況

ほけきよう

だいもく

せめられて実語となり候。いおうや、法華經の題目をや。

おしろい

ちから

うるし

へん

ゆき

しろ

しゅみせん

白粉の力は、漆を変じて雪のごとく白くなす。須弥山に

ちか

しゅしき

みなこんじき

ほけきよう

みようごう

たも

ひと

近づく衆色は、皆金色なり。法華經の名号を持つ人は、

いっしょうないしか こおんのんごう

こくごう

うるしへん

びやくごう

だいぜん

一生乃至過去遠々劫の黒業の漆變じて白業の大善とな

る。いおうや、無始の善根、皆変じて金色となり候なり。
況　むし　ぜんこん　みなへん　こんじき　そうろう

しかれば、故聖霊、最後臨終に南無妙法蓮華經ととな
こしよりよう　さいごりんじゆう　なんみようほうれんげきよう　唱

えさせ給いしかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種と
たま　いつしやうないしむし　あくごうへん　ほとけ　たね

なり給う。煩惱即菩提・生死即涅槃・即身成仏と申す法門
たも　ぼんのうそくぼだい　しやうじそくねはん　そくしんじやうぶつ　もう　ほうもん

なり。かかる人の縁の夫妻にならせ給えば、また女人成仏
ひと　えん　ふさい　たま　にょにんじやうぶつ

も疑いなかるべし。もしこのこと虚事ならば、釈迦・多宝・
うたが　そらごと　しやか　たほう

十方分身の諸仏は、妄語の人、大妄語の人、悪人なり。一切
じつぽうふんじん　しよぶつ　もうご　ひと　だいもうご　ひと　あくにん　いつさい

衆生をたばらかして地獄におとす人なるべし。提婆達多は
しゆじよう　誑　じごく　墮　ひと　だいばだつた

寂光浄土の主となり、教主釈尊は阿鼻大城のほのおに
じやつこうじやうど　しゆ　きやうしゆしやくそん　あ　びだいじよう　炎

咽 たも にちがつ ち お だい ち 覆 かわ

むせび給うべし。日月は地に落ち、大地はくつがえり、河は

さか なが しゅみせん 砕 落 にちれん もうご

逆しまに流れ、須弥山はくだけおつべし。日蓮が妄語には

じつぼうさんぜ しよぶつ もうご ぎ そうろう

あらず、十方三世の諸仏の妄語なり。いかでか、その義候

覚 そうら くわ げんざん ときもう そうろう

べきところおぼえ候え。委しくは見参の時申すべく候。

しちがつじゅうよつか にちれん かおう

七月十四日 日蓮 花押

みようほうあまごぜんもう たま

妙法尼御前申させ給え。